

混 凝 土 道 路

(一)

金 森 誠 之

— は し が き —

混凝土道路の測量から初まつて、竣功する迄の施行道程にからめた物語りである。技術者には勿論素人にも混凝土道路はどうして出来るかを判らしたい」事を目的として、多少とも劇的刺戟をも含ませたいと希望したのであるが、この堅い場面を、軟かく物語りで包もうとする、殊に仕事の順序に話を進めようとする無理が通るかどうか……………。

九號國道の改良工事が初まつて、新線の測量も、平面、高低と進んで、今日はその高低も終らうとする最後の日である、S技手が最後のバックサイを見るため廻さうとした

レベルは其の途中妙な所で留まつて動かない。

「君何處を覗いて測量してるんだ？」

通りかゝつたT技師はSの肩を叩いて笑ひながら尋ねる。

Sは先に見へる家を指しながら、

「あの小松屋で又娘がいちめられてゐますよ、變な男も座つて居ましてね、——一寸御覽んなさい」

T技師が、眼を當てゝ覗いた時、思はず「アツ！」と叫んだ、レンズの中では娘がお袋らしいのにひどく打たれたのであつた。

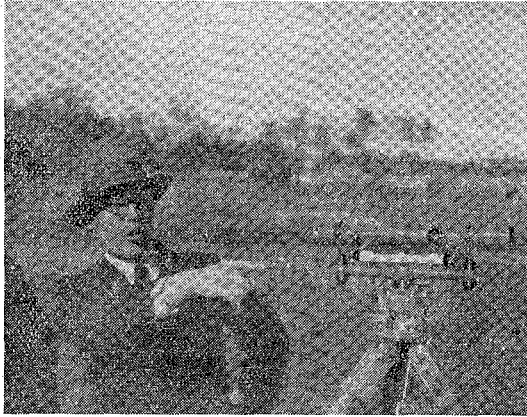
小松屋の娘と云ふのは、さる大家の育ちであつたが、父の事業の失敗、その苦が基となつて引きつゞき兩親を失ひ、

— 二 —

母が息を引き取らうとする時、残り少ない財産をつけて、娘美智子を乳母の妹のお松に貰つてもらつたのであつた。

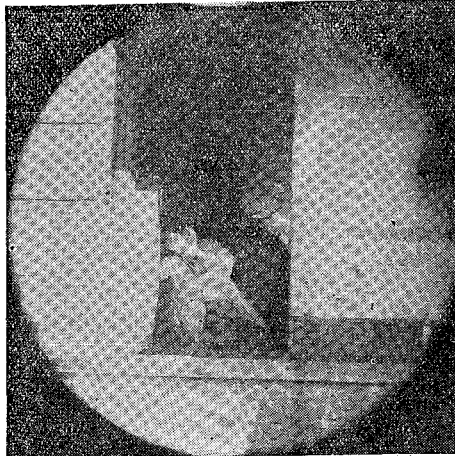
當時は大切に

してゐたらしいが、年末の不始末なお松は金も使ひはたし、今では美智子を種にして、うらぶれた飲食店を国道沿ひに開いて居たのであつたが、今日は金の代りに娘を渡さうとしてゐるのである。



小松屋に居た男が飛び出して来て、手を上げると、恐ろしく悪道路に揺られて来た圓タクは急いで止まる。

「圓タクつかまへたよ、早くおいで！」



賃金の交渉をしてゐる、内では身仕舞を整へた美智子は急いで箱の中から指輪を捜し出し、じつと見つめてゐる眼には大きな露さえ宿してゐる。

「亡母さん！ 今日まで隠し通せたお片身も今度と云ふ今度は何とか致させて頂きます」

ほつと吐息をつく。

「美智子！ 何してるだい！ 早くしないか」

隣室からのトゲくしい聲に美智子は急いで指輪を帯の内へ挟む。

待ちかねて養母は荒々しく障子を開けて、飛び込むなり

娘を表へつき出し、男と一所になつて車に押し込んでしまつた。

「歸つて來たつて家へは入れないよ」
苦々しい捨臺詞。

道が悪くて猛烈な揺れ方である、果は片輪は泥穴に落ち込んで急停車してしまつた。

「アツ！」美智子が前にツンのめつた瞬間に、扉が開いて帯から飛び出した指輪はコロ／＼と轉げ出して泥の中に沈んでしまつた。

指輪に氣がついた美智子は、帯の間や自動車の中を捜しても見當らないので、青くなつて自動車から降りて泥の中を捜し初めた。



「どうしたんだ」

「指輪を落したんです」

「何指輪？ お前の指輪なら夜店でいくらでも買つてやるよ」

「そんなのでないんです、片身のダイヤモンドなんです、それをお金にして今度は何とかするつもりで居たのです」

男はそんな筈がない、いゝ加減な事を云つて逃げるつもりなんだらうと、美智子を引つたてる。

「自動車はコワレて動きません」運轉手は自分の車の碎れたのも忘れて氣の毒さうに連れられて行く美智子を見てゐる。

三

その頃内務省は失業救済の爲め旺んに國道改良工事を行つて居た、自動車をコワして車輛主から追はれてしまつた

運轉手の大宮も、登録して救済されることになり、特に運轉の技能のある爲め、ローラーを運轉することになった。

然し智識慾に満ちた彼れには、何も判らずに夢中で動かしてゐるのは如何にもつまらなかつた。

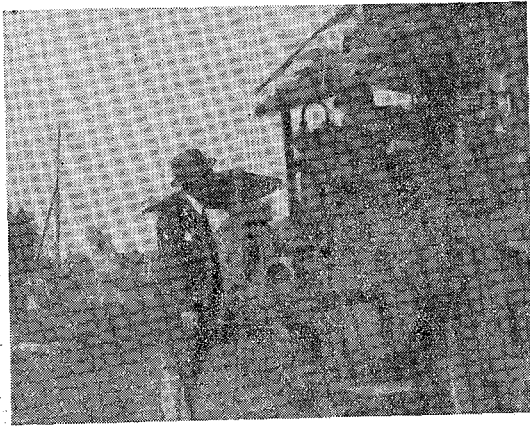
「旦那これは一體何回轉せばいゝんです。

通りかゝつた技手に尋ねかけた。

「普通二十回か三十回位だがね土質によつて異ふよ」

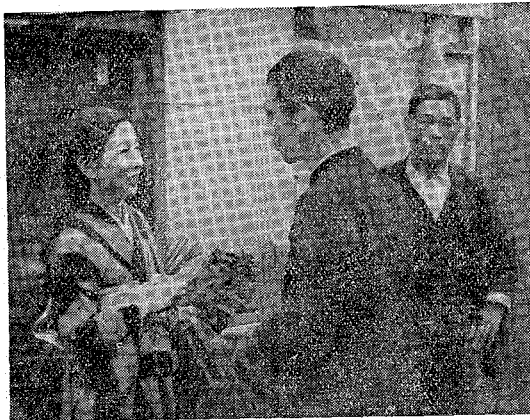
と云つて、大宮

に變つた場所を運轉さして見て、其の程度を丁寧に教へてくれる。ローラーが動いて、其れにくつついた泥の中にピ



カ／＼と光る指輪のあつたのも二人が氣附がずに、指輪は再び土に埋れて軋壓されてしまふ。

現場ではタンデム、マカダムといろ／＼のローラーは動いてゐる。



「君、何處へ行くんだ？」

「夜學へ通ひ初めたんだよ、そうすると仕事も面白いよ」

とある場末のカツフェー前で、大宮は友達と出會つ

て立ち話をしてゐる時、ビール瓶が投げ出されて來た。驚いて其の方を見ると、若い娘が飛び出して出會頭に、

大宮と顔を見合す。

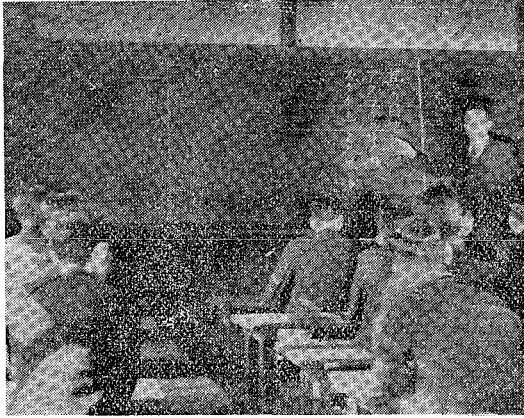
「アラツこの間の——」

娘の聲の終らぬに、中から出て来た女將に娘は中へ引き
づり込まれた。

二人は呆氣に取
られて、カツフェ
ーの中を覗き込み
ながら、別れて行
く。

「あゝそうだ、こ
の間の指輪を落し
たお客さんだ、可
憐さうに——」

大宮は娘の顔を
頭に浮べながら學
校へと急ぐ。



— 五 —

學校で混凝土道路の講義が進んで行く、道路の混凝土は



堅練りで、水はセ
メントの〇・四見
當であることや、
一層式二層式の構
造、エラストイト
の入れ方、等と仕
事をしてゐる大宮
には其の講義がは
つきりと判つて、
黒板に現場の有様
があり／＼と見え
る様である。

然し、來がけに會つた娘の事は頭にコビリついて離れな
ら。講義が進んで、道路に鐵筋を入れる話になつた頃、頭

の疲れも手傳つて、先生の云ふ事が丸で判らなくなり、黑板全體に娘の顔が現れて、それが如何にも悲しそくに、哀願してゐる。賃金でも貰つて金が這入つたら一度訪ねて見てやらうと決心した。

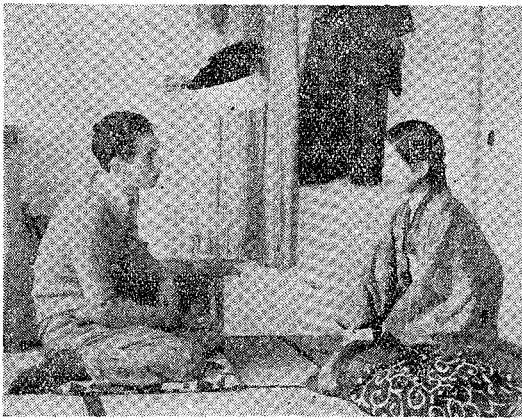
— 六 —

とある日の午後下り、カツプエーの暇さうな時を見計らつて、大宮は美智子を訪ねて身の上話を聞いた。

大家の娘でありながら、悪い奴を親とした爲め、次から次へと、娘を種にして金にしようとして苦しめられてゐる。

頼みにして居た片身の指輪も落してしまつた、其の落した事には大宮にも大に責任がある。

娘は涙をためて物語りつゞける。



「私を種にして五十圓借りて居るんです。そのためにこちらでは妾に無理を強いられてゐるんです。いつも口ぐせの様に「今時普通の女給勤めに五十圓と云ふ大金を出す馬鹿はないよ」と云はれまして……」

聞いてゐる大宮の手は財布の中の金を出したり、入れたりしてゐる、渡さうか渡すまいかと決心がつかぬのであらう。

「妾とした事が、よく存じ上げないあなたにまでこんな話を致しまして、——何とかして身を守りますわ。御心配なく」
其の時、お松が又も娘の金をしげる爲めに這入つて來たのを二人共話に夢中になつて氣附かなかつた、お松は窓の陰から、見知らぬ男と熱心に話してゐる美智子を見守つてゐる。

「そんな工合では、君にはとても守りきれない。

五十圓あればいゝんだらう、返せばこの家では文句があ

るまゝ」

大宮は全財産五十圓を掴んで美智子の前にさし出した。

「あらいゝんですの、そんな御心配をかけては——」

「いやとつて置きなさい、何かの時にはこれを出してウンとらばつてやりなさい」

無理無理、娘に金を推し渡して、大宮が歸つて行く。

大宮が、まだ二三軒も行かぬ頃であらう、お松は矢庭に美智子を捕へて、

「お前今金を貰つたね、お出し……」

と云ひながら帯の間からぬき取つてしまつた。

「あゝ、どうしよう——」身も世もあらず美智子は泣き入つてしまつた。

お松は酒々として、

「又かせげばいゝんだよ、泣く事ないじやないか」

— 七 —

大宮は學校から下宿へ歸つても夜の更くるまで勉強する

のが常であつた、今晚もノートの復習に餘念がない。

「路盤が非常に悪いときは、混凝土の厚さはどれ程厚くするのだらう？」

混凝土に鐵筋を挿入する講義に注意を缺いた大宮は、ノートの缺けた所を見つめながら考へて居た。

「あゝ、そらだ鐵筋を入れるんだ。

何て馬鹿だらう、今日仕事場で入れて居たじやないか」

仕事場を思ひ浮べると、室の一隅に其の施行法はありありと見える様である。

自分も學校へ通つたり、技師に説明を聞いたり、殊に主任技師であり、學校の先生でもある、富岡さんは、いつも懇切に教へてくれる。

不意に襖が開けられた、大宮は驚いて見上げる、美智子は風呂敷をさげて、息をはづませながら、飛び込んで來たのであつた。

「どうしたんです」

「逃げて來ましたの、他にに行く所がないんですもの」

オゾ／＼してゐる娘を落ちつかせながら、大宮は美智子
の話を聞いてゐる。

「あの晩頂いたお金が直ぐ母親に取りあげられてしまいま
したの、——妾達の知らぬ間に這入つ
て来て、丁度お金を頂く所を見たらし
いんです、お歸りになると直ぐでし
たわ」

「それから毎晩あなたを呼んで又金を
貰へと、それは殿しいんですの、そん
な譯に行かないと申しますと、それ
は貰へる様な人を世話してやると云つ
て變な男を引っぱつて参りましたの」

片唾をのみながら大宮は聞いてゐる。

「昨晚でしたか其の男が妾に無體な眞
似をするから指に噛みついてやりまし
たのそうすると何だか大騒ぎになつて愈々今晚其の男と一
所に何處かへ行けと云ふ事になつてしまいましたんです」



「妾何んなに苦しくたつて働くわ——正しいことならば、
あの養母に捕まりさえしなければ、何んな仕事でもするわ」
耳を傾けて居た大宮は大きく首肯しながら、

「宜しい、私は引き受けましょう——國
道工事に働きに出なさい、私から技師さ
んに願つてあげます。

「そんな奴はあなたの母でも何でもない
赤の他人なんだから、ちつとも心配はい
らない。

仕事場で見つかつたつて、僕も居る事
であり、追ひ拂つてやりますから」

聞いてゐる、美智子の顔は和かになつ
て行つた、頬には赤味をさして来たでは
ないか、嬉しさに堪えぬ様に幾度も頭を
下げて「お願ひします」「お願ひします」

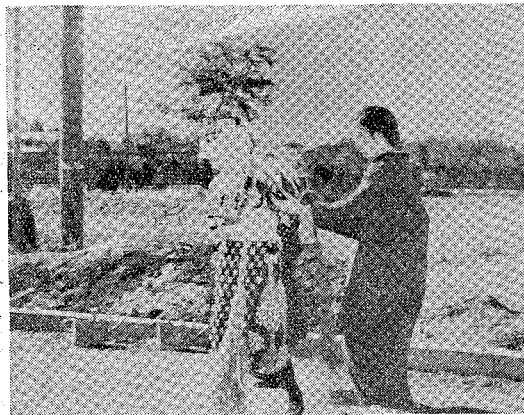
と頼むのであつた。

八

この頃の空は澄み渡つて爽々しい秋となつた、菊も咲いた、工事は日一日と進んで行く。

型板も据えつかつて、充分堅められた路盤に散ばつた塵などを、女人夫達がせつせと箒で清めて行く、水を散いて居ないのは盤には適當の濕り氣があるのであらう、軽いローラーが其の間に動いてゐる。

其の女人夫に交つて、今日からは一際目立つた美人が働いてゐる、安つぽい木縮緬を着て手甲脚絆にはだし足袋などをはいてゐるが、姉さん被りから覗いてゐる眼差は黒水晶の瞳に輝々いて、にこやかな豊頬は如何にも晴々しい、美しい俤である。



ミキサの方へふりむいて、喜しそうに大宮運轉手に挨拶をする。「お早よう！」それは美智子であつた。

邊境はかくも人を變化さすものであらうか正しからぬ氣にそまぬ仕事を強いられてゐた彼の女は如何に着飾つてもこんな美人ではなかつた。自分の動かす、一手一足は臆で、立派な道路となるのである、人の爲めである國の爲めである、身體は慣れぬ仕事に疲れ果てたと云へ、仕事を終つて歸るさに貰ふ賃金は、その額こそ少ないが、彼の女はこれ迄こんな美しい嬉しい金を握つたことはなかつた、殊に——愛する恩人——大宮の學資にも變らうとするのであつては。

九

ローラーの運轉から、混凝土ミキサの運轉に移つた、

大宮も美智子の美しさに今更ながらウツとりとするのであつた、可憐な姿でにこやかに挨拶する彼の女に引き込まれて、自分がミキサーを運轉してゐる事を忘れてしまつた。

天氣である。美智子は、愉快さうに、帚を動かしてゐる。一木片などは、餘程注意して掃除して置かないといけないんですつてね」

ハンドルが誤られて、ミキサーは急廻轉を初めて通りかゝりの定工夫を驚かす。

「君！ 早過ぎるじゃないか、一分間に二十回だよ！」

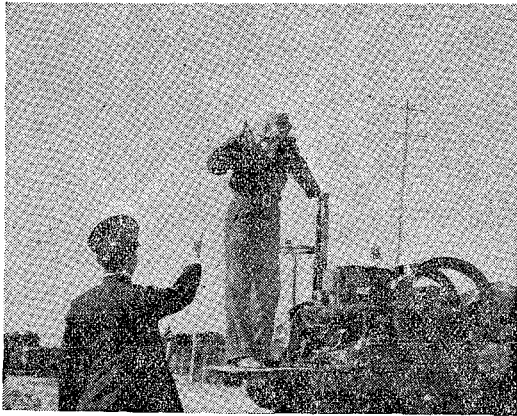
「廻りの早さは、一秒に一米だからねそんな早過ぎてはいけないよ」

吾に歸つた大宮は頭をかきく、てれくさそうに、

「一分半位練ればいゝんですね」

と尋ねながら、普通の運轉にかへす砂利、砂、セメント、とホツプーに

入れられて、學校で習つた通り、水をセメントの四割位入れた、堅練りとして運轉はつゞけられて行く。晴れ渡つた



智子の手を取つてつれ行かうとする。友達の人夫はその間にわけ入つた。

友達の人夫は親切に教へてくれる。

「木片がその儘混凝土の中へ這入つてしまふとそこが腐つて、後で混凝土がそこから破れるんだつて、いつか妾、とても叱られたわ」

その時である、近所の村へ油を賣りに行つた歸るさでもあらう、養母のお松は人夫姿の美智子を見つけて、急いで仕事場に這入り込んで来た。

「お前こんな所ににげて來てたのかい」

驚いた美智子は故意と知らぬ顔をして仕事を つゞけてゐる、お松は益々怒つて美